

あすかでらせいほういせき
飛鳥寺西方遺跡

はじめに

飛鳥寺西方遺跡は、旧飛鳥寺境内の西側に広がる遺跡です。この調査は、飛鳥寺西方遺跡の規模や構造を明らかにすることを目的とした範囲確認調査で、飛鳥寺西門跡から西に100mの位置にあたります。

飛鳥時代において、飛鳥寺西方地域は、歴史的な出来事の舞台としてたびたび登場します。『日本書紀』によると、斉明天皇の時代には、飛鳥寺西に須弥山の像を置いたと記されており、壬申の乱(672年)では飛鳥寺西の槻の樹の下で軍営が置かれていたとも記されています。また、天武・持統天皇の時代には、蝦夷や隼人、多禰嶋人や都貨羅人などの飛鳥から遠く離れた地域に住む人々を槻の樹の下に招いて饗宴をおこなったとも記されます。一説では、大化の改新(645年)前には、中大兄皇子と中臣鎌足が蹴鞠を通して出会ったのもこの飛鳥寺西方にある槻の樹の下とも言われています。このように飛鳥寺西方には、大勢の人が集まり、シンボルとなる槻の樹がそびえていた‘槻樹の広場’が広がっていたと考えられています。

検出遺構

今回の調査では、石組溝、砂利敷、穴、素掘溝を検出しました。

石組溝は東西26mにわたって検出されました。1.3mの幅で敷き並べた底石とその両側に側石を立てた溝状の構造で、深さは約15cmをはかります。溝の底石には石の大小が認められ、石の敷き詰め方にも粗密があります。また直線状に石を並べた石列も複数みられ、石を敷き詰める上での作業単位と考えられます。この溝の南側には部分的に敷石が残っており、溝につながるテラスが広がっていたと考えられます。また、この溝は調査区の東西で約10cmの高低差があります。これらのことからこの溝は、排水溝ないし区画溝であると考えられます。

穴は橙色の土や焼土を埋めた穴で、平面形はいずれも不整形です。大きさは33～116cmあります。この穴は東西に13基並んでおり、2.4～2.7mの間隔で不規則に並んでいます。

砂利敷は約3cm大の石を敷き詰めたものです。全体的に遺存状態はよくありませんが、調査区の東側で残っています。この砂利敷は穴の埋土を覆っているため、砂利敷の方が穴より後に施されたことがわかります。

調査区からは土師器や須恵器、瓦が少量出土しました。厳密な時期を特定できるものはありませんが、これらの遺構が営まれた時期は飛鳥時代から古代と考えられます。

まとめ

調査の結果、これまで飛鳥寺西門の周辺で確認されていた砂利敷が、調査地周辺まで広がることになりました。そして、砂利敷に隣接する石組溝と穴がさらに西側に展開することから、遺跡がさらに西側に広がることが明らかとなりました。槻樹の広場と関連する遺跡において、遺構の広がりを確認できたことは、槻樹の広場の範囲を検討する上で重要な成果であるといえます。



飛鳥寺西方遺跡

2013年12月

明日香村教育委員会

